

平成 21 年 6 月 19 日現在

研究種目：基盤研究（B）  
研究期間：2006 年度～2008 年度  
課題番号：18330134  
研究課題名（和文） 地方出身団塊の世代の老年期移行期における職業再適応：生涯発達  
の視点からの追跡調査  
研究課題名（英文） The occupational re-adaptation of provincial baby boomers in their  
transitions to senescence: longitudinal study of life-span  
研究代表者  
細江達郎（HOSOE TATSURO）  
岩手県立大学・社会福祉学部・教授  
研究者番号：70004059

研究成果の概要：青森県下北半島出身者（昭和 39 年中卒者）の職業的社会化過程に関する追跡調査の一環として、現住地面接調査（有効面接数 47）・質問紙調査（有効回答数 125）を実施した。その結果、老年期移行期は都市周辺地域居住型と出身地域回帰型に分けられ、後者は対象者の 50 歳時点での予測（40%以上）とは異なり少数であった。前者は、都市周辺地域社会内で生活基盤を形成してきたものが多く、再適応が比較的安定している一方で、都市不安定就労を継続し出身地域とも交流に欠ける者も少なくない。

## 交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006 年度	2,300,000	690,000	2,990,000
2007 年度	2,800,000	840,000	3,640,000
2008 年度	2,200,000	660,000	2,860,000
総計	7,300,000	2,190,000	9,490,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・社会心理学

キーワード：老年期・移行期・職業的社会化・社会心理学・団塊の世代

## 1. 研究開始当初の背景

本調査研究の前提となっている調査は以下のとおりである。

(1) 昭和30年代（昭和37-39）：科学研究費補助金『青年期の社会化過程に関する社会心理学的研究』（代表 安倍淳吉／本研究代表者は当時調査補助者） 「九学会連合：

下北半島総合調査」による、下北半島出身者の当時の中学3年生（昭和39年3月卒）の進路決定過程を対象とした調査が前提となっている。この時点では青年期の社会化の地域類型とその移行が明らかにされた。

(2) 昭和40年代（昭和45-47）：科学研究費補助金・特定研究（産業構造の変革に伴う

諸問題) 『産業構造の変革に伴う青年労働者の再適応過程に関する社会心理学的研究』(代表 安倍淳吉/本研究代表者は分担者) (1)と同対象者の産業場面での適応過程を対象とし、20歳台の都市での転職再適応過程が明らかにされた。

(3)昭和50年代(昭和54-56):トヨタ財団研究助成『下北半島出身者の職業的社会化過程についての再追跡調査研究』(代表 細江達郎) 昭和30年代、40年代と断続的に続けられた追跡調査を、対象者が30歳台の時点で集中的にとりまとめ、その後続く研究の基礎を作ることとなった。

(4)昭和60年代(昭和62-63):科学研究費補助金『地域文化の均質化に関する総合的研究(課題番号62300019)』(本研究代表者は分担課題担当)九学会連合の最後の総合調査で「職業的社会化過程の変容と均質化」を担当し、これまでと同様な追跡調査を行った。ここでは追跡対象者の出身地域の現中学生の進路が比較されその変容と日本全体との均質化について明らかにされた。

(5)平成2年:トヨタ財団研究助成『下北半島出身者の職業的社会化過程についての追跡調査研究=成人期発達研究の総合化をめざして』(代表 細江達郎) 同対象者の40歳台の調査が行われた。

(6)平成7年:シニアプラン開発機構研究助成「シニアライフの諸問題に関する研究」『高度成長期都市流入者とその子弟の職業的社会化過程におけるギャップの様態』(代表 細江達郎) この時点から、対象者の老年期移行について研究の焦点がシフトしていった。ここでは本調査の対象者の一部となる、地方から都市への就労者が、自分達とは時代的地理的に異なる都市で生育した彼等の子弟が展望する職業や進路展望との

間に生じる大きな較差やギャップを取り上げた。それが彼等の引退期、老後の生活に多様で困難な問題を生じさせてくることを明らかにしてきた。

(7)平成8年:ユニバーサル財団研究助成「高度成長期地方出身都市就労者の老年期の展望=生涯発達の視点からの長期追跡事例調査から=」(代表 細江達郎) この研究が本研究の直接的な出発点となっている。ここでは対象者が「自営業的キャリア」「組織産業周辺部キャリア」「不安定就労のキャリア」と3分され、それぞれ不況期、低成長期の老後について困難な展望をもつことを明らかにし、出身地域回帰、組織産業離脱、再自営業化などの老年期の再適応の問題点が明らかにされた。

本研究は対象者が60歳に差し掛かる時期に、こうしたこれまでの調査研究で確認されてきた老後の見通しや展望がどのように現実化していくのか、そのために対象者はどのような準備をしようとしているのかを明らかにしようとするものである。これまでの各種助成等によって継続されてきた調査とその結果はまさに今後の調査研究の準備と基礎を構成するものであり、本研究はそれらを生涯発達研究の視点でとりまとめていくものである。

## 2. 研究の目的

(1)「団塊の世代」である同一対象者を中学時より約40年継続してきた職業的社会化過程の追跡調査を成人期から老年期に移行する現時点に再開継続することにより、発達研究の重要な視点である生涯発達研究に理論的・実証的に貢献することを目的としている。

(2)追跡対象者のうち、都市就労層を中心として、老年期移行期の職業および生活の再適応過程とその展望を、職業、家族、出身地域との3視点の関係を中心に事例研究により

明らかにし、出身地域回帰を含めた安定的な  
老年期への移行のための施策を提案する。

### 3. 研究の方法

#### (1) 対象

青森県むつ市田名部中学校、大間町大間中  
学校、奥戸中学校、脇野沢村脇野沢中学校、  
小澤中学校、滝山中学校、九艘泊中学校、東  
通村南部中学校、尻労中学校、尻屋中学校(学  
校名称は当時)昭和 39 年 3 月卒業生約 900  
名が基礎的な対象者である。この中から、む  
つ市田名部中学校卒業生約 400 名以外の 9 中  
学校卒業生をインテンシヴな追跡調査対象  
者としている。

#### (2) 調査方法

##### ①面接調査

調査対象者：下北地域郡部中学校 1964 (昭  
和 39) 年 3 月卒業生 (9 校 544 名) の住所判  
明者全 338 名のうち、面接調査に協力してい  
ただいた 49 名 (内、有効回答は 47 名)

調査方法：面接員による聴き取り調査(他記式  
半構造化面接)を対象者の自宅、職場などを訪  
問して実施。

実施時期：《関東地域》2007 年 3 月 16 日～  
22 日 (対象 12 名)、2008 年 3 月 7 日～11 日  
(対象 3 名)、2008 年 8 月 24 日 (対象 1 名)、  
《下北地域》2007 年 8 月 10 日～17 日 (対  
象 23 名)、2008 年 8 月 12 日～17 日 (対象 8  
名)

調査内容：対象者の属性、現在の職業、最初  
の職業、転職経験、これまでの社会移動歴、  
人生での大きな出来事、将来についての展望、  
下北地域についての意見などを聴取した。

##### ②質問紙調査

調査対象者：下北地域郡部中学校 1964 (昭  
和 39) 年 3 月卒業生 (9 校 544 名) の住所判  
明者全 338 名のうち、面接調査を実施した  
49 名を除く 289 名。このうち、調査協力を  
お願いできる 287 名の方に調査を依頼。

調査方法：郵送調査法 (自記式。調査票を郵  
送にて送付、対象者自身が回答を記入した後、  
郵送にて提出)

調査期間：2008 年 9 月 15 日～10 月 15 日・  
調査項目：対象者の属性、現在の職業、最初  
の職業、転職経験、これまでの社会移動歴、  
人生での大きな出来事、将来についての展望、  
下期他地域についての意見など

回収状況：有効回収数 125 票 (43.6%)

### 4. 研究成果

成果の詳細は文末に記された各報告によ  
るが、ここではそれらの成果を概括的にとり  
まとめる。

#### (1) 対象者の生涯発達の経過

##### ①中卒時から就労まで

戦後間もない昭和 30 年代の後半に中卒時  
を迎えた対象者は、出身地域の農山漁村の生  
活基盤が衰退し、保護機能や教育基盤が脆弱  
な環境の中で、地元地域外に卒業後の進路を  
選択することとなった。朝鮮戦争特需から日  
本経済は急激に発展し、工業を中心とした高  
度成長時代を迎え、多くの若年労働力を必要  
とする時代に、彼らは出会うこととなった。

当時都市社会では既に高校進学が一般化  
しており、地方農山漁村が低廉な若年労働者  
の中心的供給地であった。本対象者におい  
ても初期の調査で含まれていたむつ市田名部  
中学は高校進学が中心となっていたが、その  
地域を除いた今回の調査対象者の多くは中  
卒の労働者として都市部に移動した。当時、  
地方においては一般に (都市において高校進  
学できる層も含め) 中卒就職が選択されたの  
である。

このギャップが「金の卵」「集団就職」と  
いう現象を生み出した。特に集団就職や金の  
卵といわれた層の就職先は大都市の近代化  
された大工場ではなく、都市にあった小規模  
な工場、商店であった。この小規模性は中卒

就職者の一定の層にはその後のキャリアに有効な機能を果たした。また、対象者の地元地域外転出は「誇り高い出郷」であり、暗い展望の中で行われたわけではない。それはそれ以前の地方の状況からの脱出であった。つまり敗戦後地方に移動した大量な人口を支えてきた農山漁業の限界とそれへの隷属（中学時に毎日数時間家業補助）からの離脱であり、また旧来型の地域外就労（親とともに漁業や土木業への出稼ぎ、紡績女工）からの脱出移行であり、大都市の復興とともに明るい上京であった。

### ②大都市産業社会との出会いと転換

誇り高い出郷意識を基底に持ちながら就労した先は、学歴社会が一般化した高度産業社会であった。多くの対象者が就いた小規模工場・商店、技能職就労などは、高度産業社会や学歴社会そのものに対峙するよりも、彼らの適応水準で適応可能な職種であった。しかし、彼らを取り巻く就労環境は厳しく、これを「がんばった」に代表される懸命な努力、自制、根性で乗り越えていった。

そうした努力で、成人期への安定的移行が困難な層では30代前後にさまざまな対応がとられた。それは手に職を付ける職人的職種や自営業化であり、また首都圏周辺部への移動、出身地域への回帰であった。出身地域回帰者は都市生活の適応レディネスを地域に活かし、地域の変化の担い手となっていった。しかしその一方で、出稼ぎなどの不安定就労継続者も抱えることとなった。

### ③成人期の生活の構築

40代前後のこの時期は地理的移動・職業移動の最も少ない時期であった。しかし、彼らの人生の主観的高揚感により描いてもらった「人生曲線」では、それ以前の高い高揚感に比して停滞を示していた。それはこの時期、子ども教育期と老親の扶養というライフ

サイクル上の課題が彼らの職業生活の発展や個人的な冒険心を縮小させる時期であったためである。しかしこの時期、職業、個人、家族、地域社会のどの領域に生活構造の厚みをどう獲得したかが、それ以降の時期の生活のあり方にかかわっていた。特に職業領域では、(a)限界下降志向（体力的、職場展望の限界）、(b)現状維持志向、(c)上昇発展志向（職業総覧、拡大）に分化した。また親世代の扶養の課題が現実化し、離職・帰郷を想定する者が増加した。この時期、行政や出身地域による団塊世代の帰郷への様々な対応が行われたが、実際には帰郷した者は後の退職期を含めて少事例であり、帰郷に伴う多様な困難性が指摘された。

### ④現在（還暦・退職期）の状況

対象者のキャリアは、基本的にはそれ以前のキャリアを引き継いだものとなっている：(i)定年のない自営業者（建設・土木・塗装・理容・菓子店・金物店自営）は自律的なキャリア展望を持ち、(ii)会社等就労層の定年後の展望は、職場で一定の地位を占め子供の教育期が終了していることから比較的安定しているが、定年後の就労形体は未確定、(iii)不安定就労層は一定事例があるがその動向は現時点で未確認。(i)(ii)では職種の特性によりこれまでの地域への関わりに違いがあり、そのことが老年（退職）期の現居住地への適応に差があった。一方では出身地への回帰は現実的な選択肢ではなく、現居住地と出身地域の双方に対応が困難な場合、老後への不安が多かった。

### (2) 総括的整理として

#### ①個人史・「状況」・時代史の出会い

個人の発達過程は、歴史的社会的な変動要因、年齢的な変化に対応した要因、多様な個人的要因との出会いで複雑に展開する。一定時点の人々のキャリアや適応状況を理解す

るときその歴史性と個人史の出会いからの理解が必要である。人々は自分の人生をその交差で語り、またそれを聞く他者はその交差を生きてきた物語に感動する。

歴史的社会的変動は社会全体に共通に起こるわけではない。それは時間的にも影響程度においても多様性とラグがある。個人の意思決定の具体的な場ではその変動内容は多様に分化しており、ラグをもって現れる。その分化した基準の全体社会の中での位置や差異を、人々はその生活史の展開の中で多様な方法で埋めていく。その摩擦やズレが、非適応を引き起こす一方で、動機づけを高めることもある。

彼らは多様な危機を努力、刻苦勉励、強い意思により克服し、それを転機として豊かな自律的な行為者としてキャリアを形成していく。そして地域格差、情報格差といった様々な困難条件を克服するために、強い意志とともに、広い展望や視野を持った人々、先輩世代・親世代・教師の器量・職場・地域社会の支援などが必要であった。こういった困難との出会いに主体的に対応できず、支援などの適切な対応がなされない場合には、不安定なキャリアや社会的非適応を生み出す。

## ②団塊の世代と地域社会の意味

団塊の世代一般は戦後青年期初期に地方地域社会を離れ、高度成長期以降の都市産業社会形成に関わってきた。都市産業社会での「会社人間的」な成長は、出身地域やその家族が共有していた子弟の教育展望とは異なる「教育の個別化（私事化）」を生み、地域社会からの乖離が起きていた。退職期には産業社会を離れ再度家庭や地域社会の中で生活することになるが、それまで地域社会と乖離してきたことが、地域社会での生活を困難にしていた。出身地域も過疎の進展、市町村合併などの変化によりその保護機能は弱化

しており、そこへの回帰は現実的ではない。都市で生育した次世代は、私事化した教育の中で、親世代とは異なる都市的な生活を展望するため、家族の保護機能も十全ではない。このように、団塊世代一般にとって都市部地域社会への復帰や出身地域への回帰は容易ではない。

一方、本対象者のような農山漁村出身者（主として中卒就職者）は、戦後の貧困と第一次産業従事の実験をし、地域社会が機能していた時代に青年期を過ごしてきた。移動した都市での生活の中で彼らが築いたのは、個人的技能中心キャリアであり、学歴に依存しない自立・自力型キャリアであった。また、このような職種の限定性は、都市の地域社会（関東周辺部の生活。いわゆる漫画『三丁目の夕日』（西岸良平／小学館）の世界）への参加を可能としてきた。このように都市部地域社会と比較的近いところで職業生活を展開してきた職人・技能層は、多様な個人的能力を持って定年のない老年期を迎える。その老年期は地域社会に自律的に関わり、地域社会内で一定の安定的な位置を占めることが可能となる。

## ③対象者が自らのキャリアを語る意味

困難を克服し自律的キャリアを展開してきた多くの対象者は、その人生を豊かに語り、基本的に肯定的に受け入れている。出身地域を出ながら自律的職種を展開した対象者は、職業社会のみに傾斜した人生ではなく、職業、家庭、地域社会、特に地域社会とのかかわりを進めてきた。このことは自身だけでなく、周囲の人々も豊かにするキャリア発展である。それは高見の栄光や虚飾による到達ではない、普通の人々の等身大の達成感の姿である。60歳時点でのその人の人生の語りは、調査員の学生世代に多くの感動を与える。こうした世代間接触の機会をさらに広げ、団塊の世代

(先輩)の人生経路、普通の人の真摯で着実な姿勢を伝える意味は大きい。この戦後史は日本の発展の基盤を支えた歴史であり、発展途上国のこれからの歴史でもある。

### (3) 団塊世代の老年期の行方

団塊の世代の老年期は、その圧倒的人口等から、今後勤労者としても、また地域社会を担う者としても大きな期待が出来る。特に前期高齢期においては、地域社会(職業社会を含む)における肯定的な役割を大いに果たすことが期待できる。一方、団塊の世代がさらに高齢化し、被保護の役割が中心となる後期高齢期に移行したとき、その量的拡大から日本社会が経験してこなかった大きな困難が予想される。日本における高齢者問題は、この15年後以降がピークとなる。老年期の社会的非適応はすでに犯罪の増加、地域社会からの孤立などに顕われ始めている。団塊の世代のこれまでのキャリアを地域社会の再生に活用することは、今後の日本の持続的な発展のための急務である。

本調査では、現段階では不安定就労層や行方不明者について把握できていない。上記のような非適応者の増大が予想される中、今後こうした対象者について改めて集中的に調査を行っていく予定である。老年期の適応・非適応問題がこれまでの人生の諸資料に総括されるとき、本調査の生涯発達研究の本当の終結となる。その意味では、本報告は未だ途中経過である。

### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

細江達郎 2009 社会変動の社会心理学: 地方出身の団塊の世代の職業経歴 『社会心理学特論』 130-142.

小野澤章子 2008 地方出身者40年のライ

フヒストリーにみる社会関係の変遷 『岩手フィールドワークモノグラフ』 10 33-45.  
山崎剛信・細江達郎 2009 フィールドノート: 還暦を目前に人は何を想うのか— 下北半島出身者への聞き取り調査から— 『岩手フィールドワークモノグラフ』 11 49-74.  
[学会発表] (計4件)

細江達郎 2006 日本社会心理学会第47回大会シンポジウム「社会変動の中のライフサイクルとコミュニティ」で発表

細江達郎 2008 団塊世代のキャリア発達=15歳から還暦までの長期追跡調査から= 日本キャリア教育学会第30回大会講演

山崎剛信・細江達郎 2007 転機の社会心理学(1) 退職を目前にして人は何を想うのか 東北心理学会第61回大会

山崎剛信・細江達郎 2008 転機の社会心理学(2) 人は六十路で人生をどう振り返るのか 東北心理学会第62回大会

### 6. 研究組織

#### (1) 研究代表者

細江達郎 (HOSOE TATSURO)

岩手県立大学・社会福祉学部・教授

研究者番号: 70004059

#### (2) 研究分担者

青木慎一郎 (AOKI SHINICHIRO)

岩手県立大学・社会福祉学部・教授

研究者番号: 60305282

#### (3) 細越久美子 (HOSOGOE KUMIKO)

岩手県立大学・社会福祉学部・講師

研究者番号: 90311894

#### (4) 糸田尚史 (ITODA NAOFUMI)

名寄市立大学短期大学部・児童学科・准教授

研究者番号: 90352484

#### (5) 小野澤章子 (ONozAWA AKIKO)

岩手大学・人文社会科学部・准教授

研究者番号: 30291850